

2020年5月10日 大井バプテスト教会 礼拝説教
説教題「これはわたしの愛する子」マタイによる福音書17章1～8節
主任牧師 加藤 誠

「六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。」すると、『これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け』という声が雲の中から聞こえた」（マタイ17・1～2、5節）

コロナ感染の悲しみと不安が広がる世界中で今、賛美が人々の心をつなぎ、支える大切な役割を担っています。

先週の日曜日の朝、ルワンダの佐々木和之さんからうれしい動画が届きました。ルワンダも感染対策のために大学や教会の礼拝が休止になっているようですが、佐々木さんが教えている PIASS というプロテスタント人文社会科学大学で平和構築を学んだデヴィット・ニリンガボさん（コンゴ人学生）が、日本語の賛美を動画にしてくれたのです。ギター片手にデヴィットさんが歌う、「神と共にある、はじめの言葉 イエス・キリスト…」という素朴な賛美に、心が慰められ励まされました。

この動画には、佐々木さんの次のようなコメントが添えられていました。「日本人がアフリカに留学したり、アフリカ諸国の人々が日本に留学して交流が始まるとこんなことが起こります。ハレルヤ！」と。大虐殺が起こったルワンダの和解を祈り、佐々木さんがルワンダに渡ったのが今から15年前。その佐々木さんの働きが、このように国境を越え、遠くアフリカと日本をつなぎ、お互いの国の人々の苦境を覚えて祈り、賛美を届け合うつながりに大きく育てられてきていることに、確かな希望を感じたのでした。

今、世界では、新型コロナウイルスの感染対策を「これは戦争だ」と叫んで、自ら「戦時中の指揮官」として振舞おうとしたり、他国を非難することで国民の不満をそらそうとする指導者がいる中で、ドイツのシュタインマイヤー大統領の言葉が心に響きました。今年のイースター前日の4月11日に発信された、「私たちは分岐点に立っている」と題したメッセージです。

「危機が進行する今、私たちには二つの道が見えています。誰もが自分のことのみを考え、人を押しつけていく世界か。それとも、人のため、社会のために役立ちたいという新たな目覚めが人びとの心に留まり続け、さまざまな創意工夫や支え合いの精神を大切にしながら続けていく世界か。」「感染症の世界的拡大は戦争ではないのです。国と国が戦っているわけでも、兵士と兵士が戦っているわけでもないのです。現下の事態は、私たちの人間性を試しています。」「コロナ後の世界は、以前とは別なものになるはずですが。それは私たちにかかっています。」「コロナ後にも、年配の隣人の買い物を手伝うような交流は続いているでしょうか。医療や介護など、人々の命を支える働きへの敬意が忘れられずに覚えられ続けられるでしょうか。経済的に今回の事態をうまく切り抜けられた人たちが、とりわけ痛い打撃をこうむっている人たちの立ち直りに手を差し伸べることができているでしょうか」と。

「このコロナ危機において、私たちの人間性が試されている」。確かにそうだと思います。私たちは、どちらの道を選び取っていくのでしょうか。

苦難や試練は私たちの人間性をあらわにします。良い部分が引き出される場合もあれば、最悪な部分があらわにされる場合もあります。苦難や試練は、わたしがいたい、どの程度の人間性をもった存在なのか、その貧しい「正体」をあらわにするのです。そのように自分の貧しい「正体」と向かい合わされることは幸いなことです。なぜなら、自らの貧しさに気づかされた者は、神の恵みによって新たに創り変えられる。これが聖書のメッセージだからです。私たちが経験する苦難や試練の中であって、私たちを根底で支え、私たちの人間性を神の愛において新しく創り変えてくださる力を持っている方、それがイエス・キリストだからです。

先ほど、ご一緒に開いたのは「山上の変貌」と呼ばれている場面です。主イエスが高い山の上に三人の弟子たちだけを連れて登った時、主イエスの姿が真っ白に輝き出し、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から響いたのでした。実はこの直前に、主イエスは長老、祭司長、律法学者たちから苦しみを受けて殺されることを弟子たちに語るのですが、それを聞いた弟子のペトロが「主よ、そんなことがあってはなりません！」と主イエスをいさめた始めたところ、「サタンよ、退け」と厳しく叱られる場面があります(16・21-23)。

弟子たちには、神の子である主イエスが殺されてしまうことが理解できませんでした。神の子が苦しんだり、人間の悪の前に敗北するなどということがあってはならなかったのです。

けれども、悪にまみれた人間が、神の愛によってまったく新しくされるために、十字架は必要だったのです。神に背を向け、隣人を愛せない、私たちの罪が神の愛の前に砕かれ、まったく新しくされるために、主イエスの十字架は必要だったのです。「お前たちには十字架で殺されていく神の子など、理解できないだろう。しかし、このイエスこそ、わたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」と、神さまは、弟子たちにイエス・キリストの「正体」を明らかにされたのでした。

主イエスはペトロとの厳しいやり取りの後、弟子たちにこう呼びかけています。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る」(16・24-25)。

聖書は、十字架に向かうイエス・キリストの姿に明確になった「真の人間性」を証しています。「真の人間性」とは何か。上記の主イエスの言葉になぞらえていうなら、「エゴを捨て、誰かと共に生きるための苦難と試練を背負うこと」でしょう。わたし自身は、エゴが強く、「人間性」において非常に貧しい者です。しかし、そのような貧しいわたしのために十字架を背負ってくださった方が、わたしに愛を注ぎ、わたしを新しく創り変えると約束してくださるのです。今、世界中を覆っているコロナ禍の苦難と試練は大きなものがありますが、主イエスの約束を握りしめながら、主イエスにしっかりつながっていきたいのです。